

楽しい体育授業の満足度に影響する要因

澤 聡美

Factors Affecting the Satisfaction of Physical Education Class

Satomi SAWA

摘 要

本論は1958年に小林が高校生を対象に行った体育授業の意識調査と2013年～2016年に大学生、短大生、保育士を対象に行った体育授業の意識調査の結果を比較し、近年の学生達が高等学校までに経験した体育授業に対する満足度とその理由及び要因にはどのような特徴があるのかを明らかにし、大学におけるこれからの体育授業のあり方を検討した。近年の学生達は高等学校までの体育授業に対して約7割が楽しかったと回答し、約3割が楽しくなかったと回答していた。先行研究では体育授業の楽しさの要因は「自分」であったが本研究では「友人」という回答が得られた。一方で、先行研究において体育授業が楽しくなかったと回答した約半数が「教師」を要因として挙げていたが本研究では「自分」であった。理由の分析から体育授業の楽しさや満足度の背景には教師の工夫された授業計画や指導行為が関与し、教師と生徒、生徒同士の肯定的な相互作用が多く、それが体育授業の楽しさに影響していることが分かった。一方で、体育授業が楽しくなかった人は教師や友人との相互作用において肯定的な経験が少ないことが分かった。多くの人が最終教育機関となる大学は運動や体育授業に対する満足度を高め、生涯にわたって運動に親しむための運動の価値観を定着させる重要な時期である。今後の授業において教師と受講者、受講者同士の関わりや学びあいを多く取り入れた、社会的相互作用を高める授業づくりが望まれる。

キーワード：体育授業，学生の授業評価，ラベルワーク

keywords：Physical education, Students' evaluation of physical education, Label Work

1. 問題の所在と本稿の目的

近年運動する子どもとそうでない子どもの二極化や、一週間の総運動時間が60分未満である子どもの多さが指摘されている。2012年全国体力調査報告書⁽¹⁾によると、運動時間が少ない中学生女子は運動が「苦手」「嫌い」「楽しくない」と答えており、一週間の総運動時間が長い人ほど「運動やスポーツが得意」「運動やスポーツが好き」に加えて「保健体育授業は楽しい」と回答している。子どもの体力低下、不活動、肥満は世界的な問題として認識されており⁽²⁾、幼児期からの遊びや体育授業を充実させ、積極的に体を動かす環境を整えていくことは今日的課題⁽³⁾⁽⁴⁾である。また運動する子どももそうでない子どもも全ての児童が運動している時間は体育の授業しかないため、体育授業の充実が期待されている⁽⁵⁾。

富山大学は教養教育において健康スポーツを必修としている。著者は様々な学部においてフィットネスを担当し、積極的に体を動かすことを楽しみに受講する学生と必修だからというネガティブな選択で受講する学生に出会い、運動の二極化が見られるのは大学においても同様であると感じてきた⁽⁶⁾⁽⁷⁾。こ

のような大学生は高等学校までに受けてきた体育授業に関してどのような意識を持って来たのだろうか。体育授業研究の方法の一つとして「子どもによる授業評価法」がある。この方法は授業を直接受けた学習者に評価させ、授業改善のための情報を得ようとするものである⁽⁸⁾。子どもによる体育授業評価構造を最初に明らかにしたのは小林である⁽⁸⁾。小林は1958年に高校生198名に行った体育授業の意識調査の結果⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾をもとに「体育授業に喜びを感じるののできない生徒は、その原因を教師に求める傾向が強く」、「教師の運動技術の指導に対する不満・恨みが体育方法に対する評価と強く結び付いている」と報告している。深見ら⁽¹¹⁾は高橋⁽¹²⁾の「体育授業に対する総合的評価に対して最も規定力をもつのは『楽しさ』に代表される『意欲・関心』次元であり、体育授業の成否を決定づける要因であるといっても過言ではない」という考えや複数の先行研究から運動・スポーツに対する生徒の満足度を規定する主要因が「楽しさ」であることから、「楽しい」という評価を「満足度」としている。「体育授業は運動嫌いの学習者が運動に参加する最後のチャンス」⁽¹³⁾

であることから、多くの人が最終教育機関となる大学は運動や体育授業に対する満足度を高め、生涯にわたって運動に親しむための運動の価値観を定着させる重要な時期である。

本研究の目的は、1958年に小林が高校生を対象に行った体育授業の意識調査の結果（以下先行研究とする）⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾と2013年～2016年に大学生、短大生、保育士を対象に行った体育授業の意識調査の結果（以下本研究とする）を比較し、近年の学生達が高等学校までに経験した体育授業に対する満足度とその理由及び要因にはどのような特徴があるのかを明らかにし、大学におけるこれからの体育授業のあり方を検討することである。

2. 方法

1) 調査の対象と期間

対象者は2013年度～2016年度に著者が担当した大学及び短期大学の授業と保育士を対象とした実技講習会に参加した受講者であった。授業や講習会の初めに受講者を対象にアンケート調査を依頼し、協力を得られた800名を対象とした。対象とした授業科目は健康スポーツ実技科目フィットネス、健康スポーツ論、スポーツと発育発達、幼児体育、保育内容（健康）である。

2) 調査票の内容と手続き

アンケート調査を実施するにあたり、授業前に受講者に調査の内容と説明を行った。表1は体育授業に関する調査票を示したものである。小林の先行研究⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾に倣って、①体育授業は楽しかったかどうか、②①の理由、③①の要因について調査するものである。

調査のインフォームドコンセントと許可を得られた受講者には、この調査は成績とは関係ないこと、無理に回答する必要はないことを説明した。

表 1. 体育授業に関する調査票

これまで小学校、中学校、高等学校で受けてきた体育授業について教えてください。

- ① 体育授業は楽しかったですか
(楽しかった / 楽しくなかった)
- ② その理由は何ですか。(自由記述)
- ③ その要因は何ですか。以下から選んでください。
(自分 / 教師 / 友達 / その他)

3) 統計解析の方法

統計解析の手続きはIBM SPSS Statics21を用いてPearsonの χ^2 検定を行った。危険率はいずれも5%未満とした。体育授業が楽しかったかどうかの理由の分析は調査で得られた362名の自由記述の回答のうち、内容が一つになるように文を区切り体育授業が楽しかった群274センテンスと体育授業が楽しくなかった群106センテンスに分けラベル図考⁽¹⁴⁾(注1)を用いて分析を行った。

3. 結果

性別による要因の差は認められなかったため、本研究の分析ではまとめて取り扱うこととした。

1) 体育授業の楽しさ、体育授業の満足度

図1は体育授業が楽しかったと回答した人と楽しくなかったと回答した人の割合を先行研究⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾と比較したものである。約7割の人が体育授業は楽しかったと回答し、約3割の人は楽しくなかったと回答しており、先行研究と同等の割合であった。

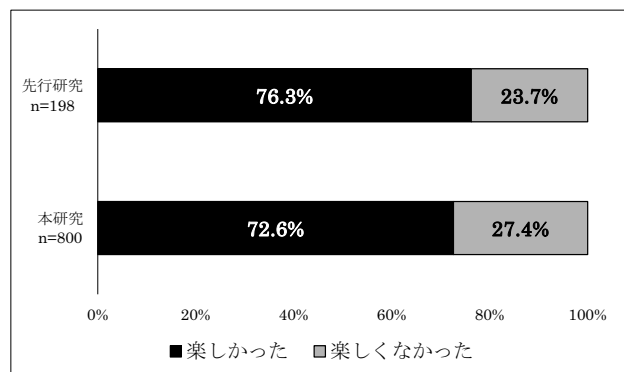


図 1. 体育授業に対する満足度の比較

(n=998, $\chi^2(1)=1.074$, p=0.172)

2) 体育授業の楽しさ、体育授業に対する満足度の要因について

図2は体育授業が楽しかったと回答した人の要因を先行研究⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾と本研究の結果を比較したものである。先行研究において、体育授業が楽しかったと回答した6割以上が「自分」を要因として挙げており、約2割が「教師」と「友人」であった。一方、本研究において最も多かった要因は約半数が「友人」であり、次に約4割が「自分」であった。

図3は体育授業が楽しくなかったと回答した人の要因を先行研究⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾と本研究の結果を比較したものである。先行研究において体育授業が楽しくなかったと回答した約半数が「教師」を要因として挙

げており、ついで約4割が「自分」を挙げていた。本研究において最も多かった要因は「自分」であり約8割を占めており、その他の要因は約1割以下であった。

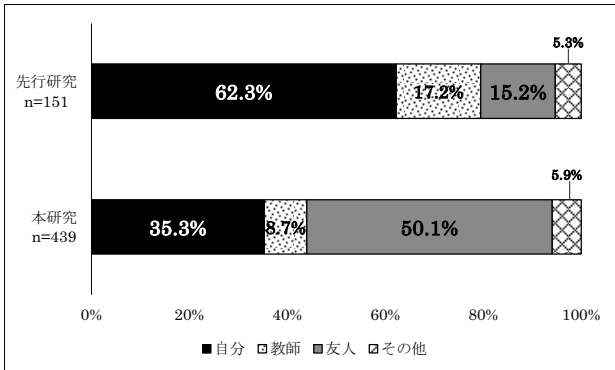


図2. 体育授業が楽しかった人の要因の比較 (n=590, $\chi^2(3)=60.19, p=0.000$)

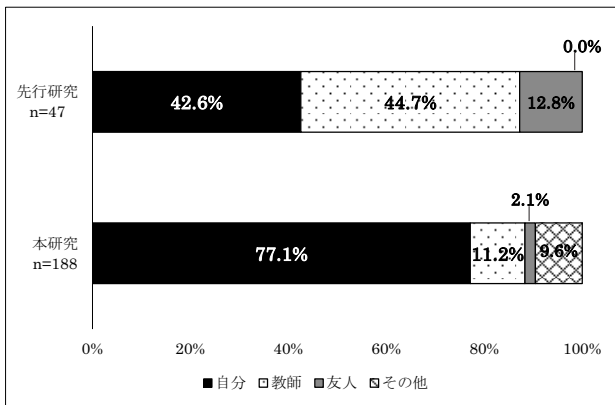


図3. 体育授業が楽しくなかった人の要因の比較 (n=235, $\chi^2(3)=44.52, p=0.000$)

3) 体育授業が楽しかった人と楽しくなかった人の要因の比較

図4は本研究において体育授業が楽しかったと回答した人と楽しくなかったと回答した人のその要因を比較した結果である。「その他」に回答した人

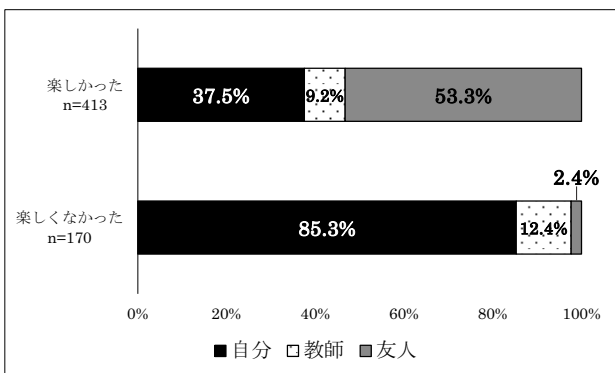


図4. 本研究の体育が楽しかった人と楽しくなかった人の要因の比較 (n=583, $\chi^2(2)=135.83, p=0.000$)

と複数回答した人を除外し「自分」「教師」「友人」の要因で分析した結果、体育授業が楽しかった人において約半数が「友人」を最大の要因としており、次に「自分」「教師」の順であった。一方で体育授業が楽しくなかった人の最大要因は「自分」であり約9割を占めており、「教師」は約1割、「友人」は2.4%という、わずかな回答だった。

4) 授業に対する意識の自由記述の分析

図5は体育授業が楽しかったと回答した人の自由記述、図6は体育授業が楽しくなかったと回答した人の自由記述の分析結果である。図5より、体育が楽しかった人に最も多い記述は「13.友達と運動するのが楽しかった」であり、次いで「3.体を動かすことが楽しい、好き」、「2.体育や運動が好き」であった。図6より、体育が楽しくなかった人に最も多い記述は「2.体育や運動が苦手」であり、次いで「12.内容によっては楽しくなかった」、「18.教師の授業の仕方が嫌だった」であった。

図5より体育授業が楽しかったと回答した人の自由記述によると、「友人と一緒に運動すると、運動が苦手でも楽しかった」、「上手な人もあまり上手でない人も楽しめる仲の良さがあったから」等、運動を通じた友人との関わりを体育授業の楽しさと感じていることが分かった。また、幼少期からの運動経験があったことから抵抗なく運動に参加することができ、体を動かすことや体育や運動そのものが好きで課題の克服や達成感も感じていた。「20.教師の授業計画や指導行為が良かった」というカテゴリーに分類した記述内容は「好き・嫌い・得意・苦手など関係なく全員参加できたし、先生も運動が苦手な子のことをしっかり考えてくれていたから」、「教師の指導がよく、友人と協力・競争して楽しかった」、「教師の授業が分かりやすく、友達と楽しくできた」と記載されており、受講者が回答した体育授業の楽しさや満足度の背景には教師の工夫された授業計画や指導行為が関与していることが分かった。受講者は生徒自らが選択できるような主体性を促す仕組みや強制されない自由な雰囲気の評価し、教師と生徒、生徒同士の肯定的な関わりを持つ運動に対し満足していることが分かった。

図6より体育授業が楽しくなかったと回答した人は、体育や運動が苦手だと感じてきた人が多く、「3.元から運動神経が悪い」と感じていた。「9.座学の方が得意」や「10.楽しくなく、興味もなく、

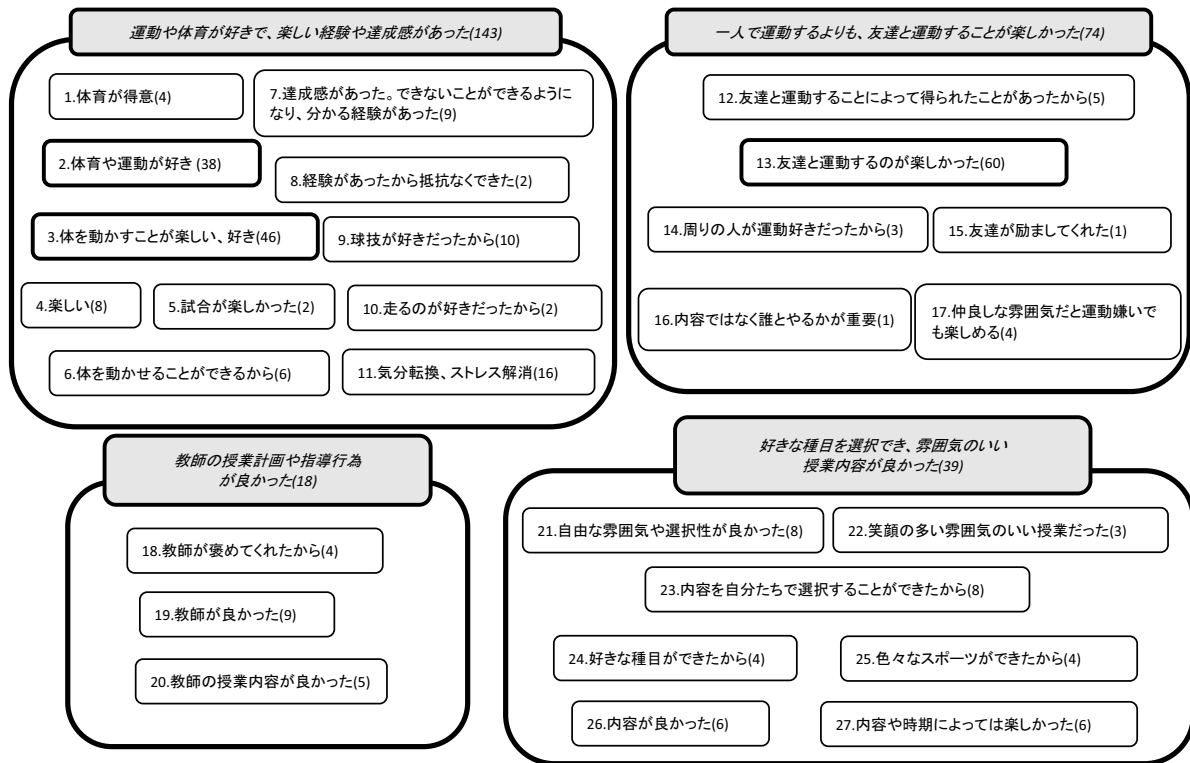


図5. 体育が楽しかった理由の分析
() は回答数を示したもの

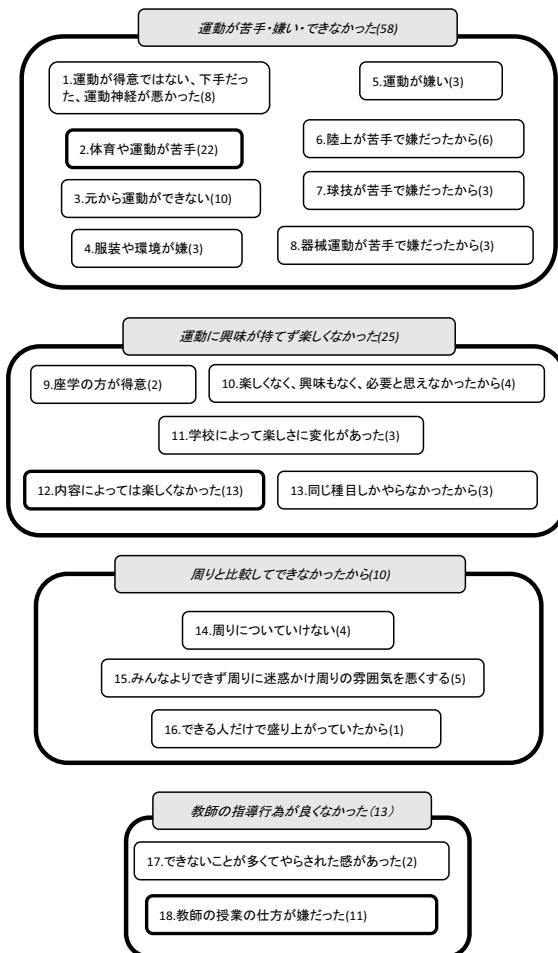


図6. 体育が楽しくなかった理由の分析
() は回答数を示したもの

必要と思えなかったから」の記述内容から、体育や運動に対する価値観は「できる、できない」、「嫌い」に固執していた。「自分が苦手なのが一番だが教師もしっかり教えてくれないし友人にも迷惑をかけるし、クラスの人がバカにしてきたから」、「教師も運動が得意な人中心の授業をしていたから」、「教師には努力を認めてもらえず、存在を無視されていたから」、「できないことが多くてやらされた感があった」、「先生によっては苦手な生徒も参加できるような授業だったのでその時は楽しかった。自分と先生との相性もあると思う」という記述内容から、自分が運動に対し苦手意識を持っていたことが楽しくなかった最大要因であると認めてはいるものの、苦手でも運動に参加できる授業内容で、できなくても努力したことを教師に評価して欲しかったという教師への思いがあることも分かった。

4. 考察

本研究の結果から、近年の学生達は小学校・中学校・高等学校で受けてきた体育授業に対して約7割が楽しかったと回答し、約3割が楽しくなかったと回答していた。この結果は1958年の小林の先行研究⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾で高校生を対象に行った調査と同程度であり、体育授業に対する満足度の割合は今も昔も

変化していないということが分かった。

先行研究⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾では体育授業の楽しさの要因は「自分」であったが本研究では半数以上の人々が「友人」を最大要因としており、自由記述で最も多い内容は「友達と運動するのが楽しかった」であった。

体育科に関しては平成11年に改定された学習指導要領⁽¹⁵⁾において「体操」から「体づくり運動」に領域名が変更し、心と体の健康の維持増進を目的とした運動内容が取り入れられた。「体づくり運動」の領域には体力を高める運動と、体ほぐしの運動があり、後者は「自己の体に気づき、体の調子を整えたり、仲間と交流したりするいろいろな手軽な運動や律動的な運動をすること」をねらいとした、「技能」ではなく運動するという「経験」を重視している。高橋⁽¹⁶⁾は近年の体育授業の教材作りにおいて「体ほぐし運動が位置づいたように、体と心の発達や社会的発達の観点から運動の価値が再評価されるようになっており、そのような発達にふさわしい教材作りが求められている」と述べている。アメリカのナショナル・スタンダードにおける学習成果の基準の一つにも「健康、楽しみ、挑戦、自己表現及び社会的相互作用のための身体活動に価値をおく (Values physical activity for health, enjoyment, challenge, self-expression, and/or social interaction)」⁽¹⁷⁾とされている。このことから近年の国内外の保健体育科の内容は他者との関わりを重視した社会的相互作用にも価値が置かれるようになっており、本研究のアンケート調査に協力した受講者が高等学校までに受けてきた体育授業にもその効果は反映されているのではないかと推察する。

杉原⁽¹⁸⁾は運動が好きになるきっかけは「能力」「面白さ」「対人的交流」、高田⁽¹⁹⁾は子どもが好む体育授業は「快適な運動」、「技術の伸長」、「明るい交友」、「新しい発見」としている。両者ともに交流を挙げていることから教師や友人との関わり楽しさ、つまり社会的相互作用の価値に気づくことができることは体育授業に対する満足度を上げるのではないかと考える。

岡澤⁽²⁰⁾は運動が上手にできるという自信である「身体的有能さの認知」、努力すれば、練習すればできるようになるという自信である「統制感」、指導者や仲間から受け入れられているという自信である「受容感」の3つの因子で構成した運動有能感尺度を開発し、運動が苦手な学習者を内発的に動機づけ

るためには「統制感」と「受容感」を高める方法を検討することが有効であるとしている。本研究でも運動が楽しかった人の自由記述には「7、達成感があった。できないことができるようになり、分かる経験があった」という内容があり、「統制感」を感じている。さらに友人や教師との関わりを肯定的に評価していたことから「受容感」も高いと推察される。しかし、運動が楽しくなかった人の自由記述には運動有能感を推察できる内容は見られなかった。杉原⁽²¹⁾は運動場面で練習しても上達しないという事実気づき、上達しない原因は自分に能力がないためだと考え、努力しても上達しないと考えると学習性無力感に陥るとしている。本研究の図6の「運動が苦手・嫌い、できなかった」、「運動に興味を持てず楽しくなかった」に属する記述からは幼少期からの運動経験の不足により、「元から運動ができない」と思い、「体を動かす行為に興味はない」というような学習性無力感を感じさせる内容であった。さらに、「教師の指導行為が良くなかった」、「周りと比較してできなかった」に属する記述からは「運動が苦手だし、教員には努力を認めてもらえず、存在を無視されていたから」、「皆の前で恥ずかしい思いをしたから」等が記載されており、教師や友人との相互作用において肯定的な関わり経験も少ないことが分かった。

岡澤⁽²²⁾は教材・教具づくり、指導スタイル、教師の行動が運動有能感を高めると報告している。高橋は⁽²³⁾「実際の授業場面においては、教材でねらいとした事柄が子どもたちに正しく学習されないケースがしばしば生じる。特に能力の低い子どもにおいてはそうであり、教師の適切な働きかけや導きが不可欠になる」と、運動や体育授業に対してネガティブな気持ちを抱える生徒への教師の状況に応じた柔軟な対応の重要性を述べている。さらに、梶尾⁽²⁴⁾は運動が苦手な子は教師から言葉をかけられた喜びを多く味わっておらず教師から助言されるという期待感も少ないことを報告し、賞賛したり励ましたり個人内の伸びを指摘したりして肯定的な言葉かけを多くかけることが大事であると述べている。

今後の大学体育において運動や体育授業に対する満足度を高め、生涯にわたって運動に親しむための運動の価値観を定着させるためには、運動の得意不得意に関わらず、各自の能力に応じた快適な運動であること、個人の技術の伸長に気づくことができ、

友人との楽しい関わりを多く取り入れ、運動に対する新しい価値観や意味づけを得られるような工夫が望まれる。そのためには能力主義にとらわれず第一に運動の経験を大切にすること、運動が苦手な運動に対して消極的な受講者においては、教師の働きかけや導き方のさらなる工夫も必要であると考え。教師や受講者同士の関わりが多い授業では、体育授業が楽しかったと思う群が感じている「笑顔の多い雰囲気の良い授業」、「仲良しな雰囲気だと運動嫌いでも楽しめる」というような、お互いを尊重し合える学習集団になることができると考える。教師と受講者、受講者同士の関わりや学びあいを多く取り入れた、社会的相互作用の多い授業づくりが望まれる。

脚注

*注1 ラベル図考⁽¹⁴⁾

ラベルやカードなど付箋を学習や思考の道具として用いる方法は、日本では1960年代後半から散見され、川喜田次郎のKJ法、梅託忠雄のこざね法、中山正和のNM法等、ビジネスマンの「知的生産の創造性技術・技法」として用いられ始めた。教育界では21世紀に入った頃から新しい学力観に立つ教育の構想が具体化され、1995年頃から教育界において林善樹のラベルワークの理論と実践が構築された。著者は2004年から林にラベルワークを習い⁽²⁵⁾、授業実践や質的研究の分析方法⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾として用いてきた。本研究では自由記述の内容の分析方法として、ラベルを用いて図解づくりを行う「ラベル図考基本型」⁽¹⁴⁾を用いて分析を行った。

参考・引用文献

- (1) 文部科学省 HP. 平成25年全国体力運動能力、運動習慣等調査事例報告のまとめ第7章運動が苦手・運動しない女子をつくらないために p.168
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/___icsFiles/afieldfile/2013/12/20/1342665_1.pdf (2017.1.15)
- (2) 鈴木宏哉. 「子どもの体力と運動・生活習慣に関する国際シンポジウム」報告. 順天堂スポーツ健康科学研究 2016; 第7巻第2号(通巻69号): 41-91.
- (3) 保育所保育指針. 厚生労働省 HP
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/>

- hoiku04/pdf/hoiku04a.pdf (2016.8.30)
- (4) 幼児期運動指針ガイドブック. 文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm, (2016.8.30)
 - (5) 白旗和也. 教科体育が果たす役割～学習指導要領が目指すもの～. 子どもと発育発達 2015; vol.13. No.1: 4-8.
 - (6) 澤聡美, 立浪勝. スポーツ健康科学・気づきコースの試み～『動かされるからだ』から『動かなくなるからだ』を目指して～. 高岡短期大学紀要 2005; 第20巻: 73-88.
 - (7) 澤聡美. 気づきを促す体育授業の実践～心と体に着目して～. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要2008; 第2号. 通巻24号: 103-112.
 - (8) 松本富子, 高橋健夫, 長谷川悦示. 子どもからみたダンス授業評価の構造—中学校創作ダンス授業に対する評価の分析から—. スポーツ教育学研究 1996; vo.16. No.1: 47-54.
 - (9) 小林篤. 運動嫌いにさせるものは何か—その社会的条件—. 体育の科学 1970; 20(5): 289-293.
 - (10) 小林篤. 体育教師と生徒の親しみ. 体育の科学 1958; 8: 150-153.
 - (11) 深見英一郎, 岡澤祥訓. 運動部活動における目標設定, 勝利志向性, 意見の反映の実態並びにそれらが生徒の満足度に及ぼす影響. 体育学研究 2016; 61: 781-796.
 - (12) 高橋健夫. 体育授業を観察評価する. 東京: 明和出版, 2003, 13.
 - (13) 岡澤祥訓. 学習論: 学習参加を促す心理的要因. 日本体育科教育学会編. 『体育科教育学の現在』. 東京: 創文企画, 2011, 166.
 - (14) 林善樹. 『ラベルワークで進める参画型教育』. 東京: ナカニシヤ出版, 2015.
 - (15) 文部省. 『小学校学習指導要領解説体育編』. 京都: 東山書房, 1999.
 - (16) 高橋健夫. よい体育授業は教材作りから(1). 小学校体育ジャーナル 2005; 45号: 1-5.
 - (17) 友添秀則. 学校カリキュラムにおける体育領域の位置と役割. 日本体育科教育学会編. 『体育科教育学の現在』. 東京: 創文企画, 2011, 21.
 - (18) 杉原隆. 『新版運動指導の心理学』運動学習とモチベーションからの接近. 東京: 大修館書店,

- 2003, 148-162.
- (19) 高田典衛. 体育授業入門. 東京：大修館書店, 1976.
- (20) 岡澤祥訓. 学習論：学習参加を促す心理的要因. 日本体育科教育学会編. 『体育科教育学の現在』. 東京：創文企画, 2011, 166-176.
- (21) 杉原隆. 『新版運動指導の心理学』 運動学習とモチベーションからの接近. 東京：大修館書店, 2003, 153-159.
- (22) 岡澤祥訓. 生涯体育・スポーツの実践者の育成を目指した体育授業. 近藤秀男ほか編『体育学論叢IV新世紀スポーツ文化論. 東京：タイムス, 2000, 273-289.
- (23) 高橋健夫. よい体育授業は教材作りから(1). 小学校体育ジャーナル 2005；45号：1-5.
- (24) 梶尾徹・橋爪和夫. 小学校の体育授業における教師や仲間の言葉がけと運動有能感との関連. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究 2012；第6号. 通巻28号：107-115.
- (25) 澤聡美. 大学教職員によるラベルワーク実践～芸術文化学部における新しい教養教育の確立を目指して～, 参画文化研究会『参画通信』 2005；vol.31：14-22.
- (26) 澤聡美. 講義「スポーツ栄養学」での図解づくり, 林善樹, ラベルワークで進める参画型教育. 京都：ナカニシヤ出版, 125-130.
- (27) 澤聡美, 三浦光司, 竹村哲：コミュニケーション能力を向上させるための関わりを重視した創作ダンスのデザインに関する研究, 日本創造学会論文誌 2016；vol.19：32-42.
- (28) 高橋健夫. 子どもが評価する体育授業過程の特徴：授業過程の学習行動及び指導行動と子どもによる授業評価との関係を中心にして. 体育学研究 2000；45：147-162.

(2017年1月17日受付)

(2017年3月9日受理)